

日本独文学会
2023 年春季研究発表会
研究発表要旨

2023 年 6 月 3 日（土）・6 月 4 日（日）

第 1 日 午前 10 時より

第 2 日 午前 10 時より

**会場 明治大学 駿河台キャンパス
リバティタワー**

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

参加費

会員 1,500 円

学生会員 1,000 円

非会員（含む学生）2,000 円

参加費は事前に振り込んでください。当日受付で支払う場合は一律 2000 円になります。

日本独文学会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6 南大塚エースビル 603

Tel./Fax: 03-5950-1147

E-Mail (メールフォーム) : <http://www.jgg.jp/mailform/buero>

春季研究発表会連絡用メールアドレス : tagung2023meiji_at_jgg.jp (_at_=>@)

目次

第1日 6月3日(土)

ポスター発表 (13:00~14:30) E会場 (1116教室) 5

Was können auf YouTube verfügbare Grammatik-Erklärvideos für den institutionellen Deutschunterricht in Japan leisten? **Axel Harting**

シンポジウム I (14:30~17:30) A会場 (1103教室) 6

近現代ドイツ抒情詩の「話者」再考——「リュリコロギー」の批判的受容に基づくケーススタディ **司会：小野寺 賢一**

1. シュテファン・ゲオルゲ「前奏曲」における「天使」の詩学的機能 **小野寺 賢一**
2. ゲオルク・トラークル『選集 1909』における「抒情詩の〈私〉」の創造と解体 **日名 淳裕**
3. パンク詩人としてのロルフ・ディーター・ブリンクマン **川島 建太郎**
4. ルッツ・ザイラー『ペヒ & ブレンデ』における一人称代名詞の再帰的・演技的な身体性 **金 志成**

シンポジウム II (14:30~17:30) B会場 (1106教室) 9

『エリーザベト』変容—「死の舞踏」vs「愛と死のロンド」—翻案ミュージカルの在り方をめぐって **司会：関根 裕子**

1. ウィーン版「死の舞踏」vs 日本版「愛と死のロンド」 **関根 裕子**
2. 日本における海外ミュージカル **渡辺 芳敬**
3. タカラヅカ版『エリザベト』の特徴 **中本 千晶**
4. 舞台・DVD 製作現場における翻訳の問題点 **高島 勲**

口頭発表：文学 I（14:30～16:25） C会場（1113 教室）・・・・・・ 12
司会：竹内 拓史・畑 一成

1. レッシング『ラオコーン』における自然模倣文学の否定 江口 大輔
2. ゲオルク・ビュヒマン『翼のある言葉』初期の編集史 佐伯 啓
3. 隠者たちの白日夢——E. T. A. ホフマンによるノヴァーリスの批判的受容 清水 恒志

ブース発表 I（14:30～16:00） D会場（1114 教室）・・・・・・ 14

Lernendenzentrierter Unterricht mit Portfolioarbeit Nancy Yanagita
(共同発表者：Maria Gabriela Schmidt, Christian Steger,
Martina Gunske von Kölln, Cezar Constantinescu)

ブース発表 II（16:30～18:00） D会場（1114 教室）・・・・・・ 14

オンライン教材を用いた発音指導および評価の方法について—学習者のワークシート分析
から 中川 純子
(共同発表者：立川 睦美)

第 2 日 6 月 4 日 (日)

シンポジウム III（10:00～13:00） A会場（1103 教室）・・・・・・ 15

ドイツ語授業における文法規則の明示的指導の役割 司会：境 一三

1. ドイツ語授業における文法の扱い—第二言語習得研究および外国語教育論の視点から
太田 達也
2. ドイツ語学習者は文法学習をどのように捉えているのか—コミュニケーション型授業に
おける学習者の自己評価と文法学習の方法 梶浦 直子
3. ドイツ語授業における文法の扱い—教科書・参考書の執筆者の立場から 清野 智昭
4. 文法の学び方をリセットする—コンセプトと実践 草本 晶

シンポジウムⅣ (10:00~13:00) B会場 (1106 教室) 18

「ペストとドイツ文学——ヨーロッパ文化史の中で再考する」 司会：関口 裕昭

1. 「ペストとドイツ文学——ウィーン文化史を中心に」 関口 裕昭
2. 「デフォーと『ペストの記憶』」 原田 範行
3. 「ゴットヘルフ『黒い蜘蛛』とペスト」 田村 久男
4. 「シュティフター『瀝青焼き職人』と『御影石』における改作とペストの記憶」 出縄 祐介
5. 「ホフマンスタール『バッソソニエール元帥の体験』における愛と死」 関根 裕子

口頭発表：文学Ⅱ (10:00~12:35) C会場 (1113 教室) 22

司会：広沢 絵里子・Tobias Schickhaus

1. 「審美主義と野蛮の近接性」を求めて——トーマス・マン『ファウストゥス博士』におけるニーチェ批判とアドルノ音楽論の交点 渡邊 能寛
2. 初期ベンヤミンの女性像 —『親和力』論におけるジンメル『ゲーテ』批判を手がかりに 寒河江 陽
3. Wut – Wahnwitz – Viren. Elfriede Jelineks Kritik des Opfer-Kults Herrad Heselhaus

口頭発表：ドイツ語教育、文化・社会 (10:00~11:55) D会場 (1114 教室) 24

司会：Susanne Schermann・水野 真紀子

1. Ich denke, was ich bin. Wie die Einstellung zu sich selbst die Lernmotivation beeinflusst. Frank Nickel
2. Gendern im Deutschunterricht: Eine Umfrage unter DaF Lehrenden in Japan Ruben Kuklinski
(共同発表者：Ralph Degen, Elvira Bachmaier)
3. ヘッセの出版企画と日本へのまなざし—『日本の物語』から見る一側面 田中 洋

第1日 6月3日(土)

ポスター発表(13:00~14:30) E会場(1116教室)

Was können auf YouTube verfügbare Grammatik-Erklärvideos für den institutionellen Deutschunterricht in Japan leisten? Axel Harting

Die vorliegende Studie basiert auf einer Analyse von zehn Erklärvideos zur deutschen Grammatik und den Ergebnissen einer schriftlichen Befragung von Deutschlernenden (GER A2) zur Nützlichkeit dieser Videos. Folgende Fragestellungen standen bei der Untersuchung im Mittelpunkt:

- (1) Welche Charakteristika weisen Grammatik-Erklärvideos für Deutsch-als-Fremdsprache auf?
- (2) Wie beurteilen japanische Deutschlernende den Nutzen solcher Videos für ihren Lernprozess?
- (3) Wie können solche Videos den DaF-Unterricht in Japan bereichern?

Im Rahmen der Videoanalyse hat sich gezeigt, dass die Moderierenden auf unterschiedliche Weise die Möglichkeiten des audiovisuellen Mediums ausschöpfen und sich bei der Instruktion verschiedener didaktischer Verfahren bedienen. Aus den Ergebnissen der Befragung ging u. a. hervor, dass die Lernenden solche Videos eher zur Wiederholung oder zur Vertiefung bereits im Unterricht erlernter Strukturen nutzen wollen; weniger, um sich damit in neue grammatische Themen einzuarbeiten. Als besonders positiv wurde es angesehen, wenn in den Videos Inhalte kurz und prägnant dargestellt werden und Erläuterungen mit Markierungen, Illustrationen und Untertiteln verdeutlicht werden. Als negativ wurde demgegenüber empfunden, wenn die Moderierenden im Video optisch nicht in Erscheinung treten, wenn schriftliche Darstellungen nicht gut lesbar sind und wenn es nicht genug Beispielsätze oder Übungen gibt.

シンポジウム I (14:30~17:30)

A 会場 (1103 教室)

近現代ドイツ抒情詩の「話者」再考——「リュリコロジー」の批判的受容に基づくケーススタディ

司会：小野寺 賢一

ドイツ語圏では近年「リュリコロジー (Lyrikologie)」という新しい学問領域において抒情詩の理論的究明が試みられている。この研究動向はヒレブランドトによって組織された DFG 研究ネットワーク「リュリコロジー」(2016-2020)によって牽引され、その議論にシュタールを中心とする研究グループが加わっている。両者はとりわけ「抽象的な作者 (abstrakter Autor)」にかんして意見の相違をみせている。すなわち、シュタールらが作中の「話者 (Sprecher)」とその価値観や遠近法を規定している「抽象的な作者」ないしは「テキスト主体 (Textsubjekt)」との区別を有効とみなす一方で (Stahl u. a. 2021)、ヒレブランドトらはこれを不要と断じ、「話者」の代わりに「発信源 (Adressant)」の概念を用いることを提唱したのである (Hillebrandt u. a. 2019; Zymner 2021)。「発信源」とは閉じられた統一体である言語記号群の配置や連続のうちであり、かつこれらの言語記号によって達成される文法的、様式的、修辭的、韻律的手法とともにある、プラグマティックな出発点の目印であるとされる。この「発信源」が作品の受容に際して、プラクティカルな出発点である実在の作者と結びつけられたり、虚構の人物として表象されたりするというのだ。

われわれは以上の議論を批判的に参照し、審級理論は象徴主義やモダニズムの詩学に影響をうけ、かつこれに対応するために構築された方法論であるというテーゼをたてる。これらの詩学は実在の詩人と「発信源」との分離を詩作の中心的動機にまで高め、それ以降の詩人たちに両者の関係にかんする詩学的省察を強いるようになった (Friedrich 1956; Stephens 1982)。審級理論はこうした背景のもとで流通した詩学的言説の残滓にほかならない。本シンポジウムでは審級理論を以上のように相対化しつつ、それを生み出した地平をも含めて「発信源」と作者との関係の歴史的変遷について考察する。

第一発表では審級理論を基礎づけるような詩学がゲオルゲによって構想されたことを指摘する。第二発表では従来「脱私化 (Entichung)」という語で説明されてきたトラークルにみられる「発信源」と作者との明確な「分離」が、むしろ両者を「結合」する詩学に通じていることを論じる。第三発表ではブリンクマンをとりあげ、従来 of 詩学的言説からの断絶を目指した新主観主義において、「発信源」と作者との一致が詩的虚構としていかに演出されたのかを確認する。第四発表ではゲオルゲならびにトラークルに影響を受けながらも「発信源」と作者との緊密な関係を「素朴」に前提としているようにもみえるザイラーの抒情詩を分析する。

【付記】本シンポジウムは JSPS 科研費 JP22K00454「ドイツ語圏を中心とするヨーロッパにおける抒情詩の『話者』概念の展開」の助成を受けた研究の一部である。

1. シュテファン・ゲオルゲ「前奏曲」における「天使」の詩学的機能 小野寺 賢一

本発表ではシュテファン・ゲオルゲ（1868–1933）の『前奏曲をともなう生の絨毯ならびに夢と死の歌謡』（1899/1900）を例として、審級理論を基礎づけたのが19世紀末の抒情詩の詩学であることを論じる。この詩集はゲオルゲの前期の作品を特徴づける暗示的詩作法から後期の教示的詩作法への転換点をなすとみなされている。その第1詩圏「前奏曲」には一人の天使が登場する。天使は従来の研究においてゲオルゲの分身ないしは自己像という観点からさまざまに解釈されてきた（David 1952/1967; Morwitz 1960; Lehnen 2017）。本発表ではここにみられる自己の二重化に注目し、それが審級理論でいうところの「実在の作者」と「抽象的な作者」との分離に対応することを論じる。そしてこの二重化の詩学が前期ゲオルゲに顕著な「芸術のための芸術」の理念と「体験詩」（Lamping 1989）ともみなされる後期の予言者の・教示的な詩作の併存を可能にしていることを示す。さらにこの併存がゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル（1770–1831）の『美学講義』（1835–1838）において定式化された抒情詩理解、すなわち「発信源」が惹起する主体の表象と実在の作者との「結合」を前提とする抒情詩理解と、詩世界を具体的な経験から「分離」したものとみなす象徴主義的詩学の両立を意味しうることを指摘する。

2. ゲオルク・トラークル『選集 1909』における「抒情詩の〈私〉」の創造と解体

日名 淳裕

ゲオルク・トラークル（1887–1914）の「抒情詩の〈私〉（Lyrisches Ich）」に関する従来の理解を『選集 1909（Sammlung 1909）』を例に再考する。

トラークルの活動は四段階に分けられる（Kemper 2014）。『選集』は表現手段を詩に定めた第一期に属し、1913年の第一詩集出版を機に封印されたが、死後に「唯の個人的記録」として公表された（Buschbeck 1939）。世紀転換期の流行文学に強く影響された亜流と見なされたためだ。

本発表は『選集』が短期間に四度の作風変化を実践した「エピゴーネンにして剽窃者、後に天才的インスピレーションを授かる改作者にして新作者」（Denneker 1999）トラークルの詩学に迫る鍵だと考える。オスカー・ヴァルツェルはそれを「三人称単数の抒情詩（Er-Lyrik）」であると説明し、その「脱私化」に象徴主義詩学の発展を見た（小野寺 2020）。これは後期の伝統的詩形式の放棄と共にモデルネの詩人である論拠とされ、審級理論の知見を得た後も基本的に修正されていない。しかし、『選集』には「抒情詩の〈私〉」と「三人称単数の抒情詩」の双方が見つかる。トラークルの「脱私化」が「抒情詩の〈私〉」の延長にではなく、「抒情詩の〈私〉」と同時に生じるためである。

3. パンク詩人としてのロルフ・ディーター・ブリンクマン

川島 建太郎

ロルフ・ディーター・ブリンクマン（1940–1975）は文学史上、ドイツにおけるポップ文学の先駆として位置づけられる存在である（Hecken u.a. 2015）。ポップ文学の季節を通り抜けた後のブリンクマン後期（1970–1975）の詩学は、新主観主義の流れの中で理解されてきた。その主たる特徴は、政治からの離反と、象徴主義以来、峻別されてきた「抒情詩の〈私〉」と作者との区別の放棄（Gnüg 1975, Selg 2012）である。

先行研究は、後期ブリンクマンにおける「抒情詩の〈私〉」と作者との一致を指摘しつつ、その理由を十分に説明していない。それに対して本発表はその一致を、ある特定の美学にもとづく文体の効果として分析する。具体的には詩集『西へ 1&2』（1975）に収録された「日曜日の詩」をとりあげ、ブリンクマンの抒情詩では否定性、「今ここ」の直接性・無媒介性、自己暴露（裸になること）を美学的原理とするパンクの文体によって、詩の「発信源」と作者の一致が演出されている、というテーゼを主張する。ブリンクマンの文学に頻出する憎悪の噴出、終末論、西洋文化批判、暴力性と野蛮性、「今ここ」の強調、セクシュアリティと身体性は、1970年代後半に現れるパンクロックの美学と共通しているからである。ブリンクマンはパンクと同様に、先行するポップ文化の表層性や商業性を否定し、批判することによって、アナーキストとしてのおのれの真正性（Authentizität）を演出する詩人である。

4. ルッツ・ザイラー『ペヒ&ブレンデ』における一人称代名詞の再帰的・演技的な身体性

金 志成

ルッツ・ザイラー（1963–）の第二詩集『ペヒ&ブレンデ』（2000）は、ピッチブレンド（Pechblende）に由来する表題が示すとおり、ウラン採掘によって破壊された故郷への追憶を主題とする自伝的な作品である。エピグラフに掲げられた「誰もがただひとつの歌を持つ」というポール・ボウルズの引用は、まさしく本詩集にひとつの分割不可能な声を聴きとるよう促すものであり、そうした統一的な「抒情的主体」の想定については、断片性やハイブリッド性といった同時代抒情詩のトレンドに与せぬ「前近代性」が指摘される（Dahlke 2007）。

他方で、本作のテキストには話者の統一性ないし「個」性に揺らぎをもたらす契機も見つかり、具体的には（1）経験的作者と語られる主体（＝幼年期のich）との隔たり、（2）社会主義プロパガンダのパロールを模した一人称複数 wir の使用、（3）ザイラーの詩論的トポスである「放心／不在（Abwesenheit）」の概念などが、先行研究においてすでに指摘されている（Leeder 2008; Kleinschmidt 2020）。本発表では、詩集の終盤に収録された「重力」を詩論的な観点から詳細に分析することにより以上の3点を改めて検証した上で、「《私》は／自分自身を体現する（das ICH / verkörpert sich selbst）」という「私」を三人称化した詩行に特に着目し、ザイラーの詩作において一人称代名詞が再帰的・演技的に帯びる身体性を考察する。

シンポジウムⅡ (14:30~17:30)

B会場 (1106教室)

『エリーザベト』変容 — 「死の舞踏」 vs 「愛と死のロンド」 — 翻案ミュージカルの在り方をめぐって

司会：関根 裕子

ウィーン発ミュージカルの代表作『エリーザベト Elisabeth』（ミヒャエル・クンツェ台本/ジルヴェスター・リーヴァイ作曲）（日本版『エリザベト—愛と死のロンド』小池修一郎潤色・演出）は、1992年のウィーン初演以来、30年にわたり世界的な人気を博している。とりわけ日本では1996年宝塚歌劇団、2000年東宝ミュージカルによる公演以後、ほぼ毎年、宝塚か東宝のどちらかで公演されるほど高い人気である。この成功の要因には、小池によって日本人に理解しやすいように翻案された内容の変更があるだろう。

原作者クンツェは、1950年代の『シシィ』3部作映画で出来上がった可愛らしい皇妃エリーザベト像を覆し、彼女の自由を求めるあまりエゴイスティックであった面を、殺人犯ルケーニに「キツチュ」な存在として批判させ、彼女を中心に「帝国の死」へ向かうウィーン世紀転換期の社会状況を描こうとした。そのためクンツェは、ヨーロッパに中世から伝わる「死の舞踏」の文化概念をプロローグから打ち出し、宗教寓意劇にある抽象概念の擬人化 Tod とエリーザベトが密かに惹かれ合い、彼女が死と「踊る＝死ぬ」までの人生を表現した。

一方、日本人観客を意識した小池による翻案では、上記のクンツェの意図した世紀末社会を描くことよりも、トートとエリザベトの恋愛が強調されている。とくに男役トップスターが主役の宝塚版では、それが顕著である。音楽面で言えば、リーヴァイのライトモチーフやリプライズ的手法によって網の目のように絡んでいた音楽面での重層性は、小池による翻案で消えてしまった箇所もある。

本シンポジウムでは、多様な側面から考察し、活発な議論を展開するために、早稲田大学の「舞台芸術入門」（世話人：渡辺芳敬）というミュージカルのオムニバス講義の担当者を招聘し、発表していただく。

最初に司会の関根が、本シンポジウムの趣旨を説明した後、ウィーン版と日本版との大きな違いとして、「死の舞踏」対「愛と死のロンド」、反ユダヤ主義運動に代わるハンガリーの独立運動の強調という点で、台本面、音楽面から比較考察する。2番目に、この作品の変容について長年研究してきた渡辺芳敬（諒）が、日本における海外ミュージカルの翻案について、公演システムの違いの視点から発表する。3番目に、宝塚歌劇研究者の中本千晶が、タカラヅカにおける海外ミュージカル上演史の転換点となった『エリザベト』の特徴について、宝塚歌劇団の歴史から紐解く。最後にオペラ演出家で、2022年シェーンブルン野外コンサート版 DVD 『エリーザベト』の字幕製作に携わった高島勲が、舞台・DVD製作現場における翻訳の問題点について発表する。

このように『エリーザベト』独日版の比較に留まるのではなく、興行面や宝塚の特殊事情の絡む翻案ミュージカルの現況と在り方をめぐって議論したい。

1. ウィーン版「死の舞踏」 vs 日本版「愛と死のロンド」

関根 裕子

ウィーン版『エリーザベト』には、中世から伝わる「死の舞踏」の文化概念が通底している。詩や版画に見られたこのモチーフは時代とともに変化し、19世紀には文学および音楽領域でも、「甘く誘惑する死」のイメージに変化している。

ハイネを愛した皇妃エリーザベトの詩にも、最終的な自由・解放としての死に対する憧れが読み取れる。台本作家クンツェは、宗教寓話劇の伝統も踏まえて、エリーザベトの憧れる対象として Tod という役柄を設定した。作曲家リーヴァイは、ライトモチーフやリプライズの音楽的手法を駆使し、作品に重層性を加えている。とくに「死の舞踏」のモチーフについては、拙論「ウィーン版『エリーザベトの「死の舞踏」』」で考察したように、多様な変化形で作品中にちりばめられている。

発表では、ウィーン版『エリーザベト』が日本語翻案『エリザベト—愛と死のロンド』に変容したことで生じたドイツ語台本と音楽の関係性の変質に着目し、以下の3点を例に挙げ述べる。

1. オーストリア＝ハンガリー二重帝国戴冠式における「死の舞踏」の皮肉
2. 「愛と死のロンド」挿入による父・トート・エリーザベトの関係性の変化
3. 「憎しみ Hass」（反ユダヤ主義のデモシーン）の削除とハンガリー独立運動の強調

このようにウィーン版と翻案との違いをテキスト面、音楽面から比較し、オーストリアの史実を扱ったミュージカルの翻案の在り方について考察する。

2. 日本における海外ミュージカル

渡辺 芳敬

日本における海外ミュージカルは、1963年の『マイ・フェア・レディ』をもって嚆矢とするが、レビュー劇団のイメージが濃かった宝塚歌劇も、東宝に遅れること4年、ブロードウェイ・ミュージカル（『オクラホマ』67等）に挑戦する。翻案公演ではなく、現地スタッフによる演出公演だ。

興味深いのは、東宝、四季がノン・レプリカ公演から、徐々にレプリカ公演に移っていくのに対し（『オペラ座の怪人』『レ・ミゼラブル』等）、宝塚は逆に、1980年代以降、ノン・レプリカ公演＝宝塚流翻案公演に転じていく。その代表作がウィーン発ミュージカル『エリザベト』（96）であったことはいうまでもない。潤色・演出を担当した小池修一郎は、宝塚固有の事情に鑑み、宝塚的改変を実現させた。もちろん小池の独断ではなく、作者であるクンツェ&リーヴァイとの合意のうえでの話である。いうならば、エリーザベトはエリザベトに変わったといえよう。

宝塚版の特徴は、劇団の特徴を前面に押し出し、男役中心の物語構成に書き換えられていること。宝塚版のあと、ハンガリー版やオランダ版、ウィーン版再演版さえ、初演と同じではなく、さまざまに変奏されているのがこのミュージカルの最大の特徴である。四季に代表されるレプリカ公演と宝塚のノン・レプリカ公演。再現か再創か。宝塚版・東宝版

『エリザベート』がそのような問いにわれわれをいざなうことはたしかである。

3. タカラヅカ版『エリザベート』の特徴

中本 千晶

タカラヅカ版『エリザベート』は、1996年の初演以来、10度の再演を重ねる人気演目となっている。その要因の一つが、小池修一郎の手による潤色・演出にあると言われている。本発表では、以下のような点についてウィーン版との比較を行い、タカラヅカ版における変更の背景を探る。

・黄泉の帝王トートが主役とされ、トートとエリザベートの「愛」の物語に比重が置かれている。これを象徴するトートの楽曲として「愛と死の輪舞」が加えられている。

・ハプスブルク帝国を脅かすものとしての反ユダヤ主義は描かれていない。代わりにハンガリー独立運動が導入され、新たな登場人物も加えられている。

こうした潤色・演出はタカラヅカ独自のスターシステムへの配慮、および日本の観客への受け入れられやすさを考慮したものと考えられている。本発表では、これらが一朝一夕で成し遂げられたわけではなく、タカラヅカの海外ミュージカル上演の取り組みにおける試行錯誤の積み重ねの賜物であることも論証していきたい。

また、この『エリザベート』上演によってタカラヅカは日本で海外ミュージカルを上演できる代表的なカンパニーの一つとしての地位を獲得した。この点において『エリザベート』はタカラヅカ、さらには日本のミュージカルの歴史における重要な転換点というべき意義深い作品であることも主張したい。

4. 舞台・DVD 製作現場における翻訳の問題点

高島 勲

2022年6月ウィーン・シェーンブルン宮殿前広場でミュージカル『エリザベート』がコンサート形式で上演され、オーストリア放送協会によって実況中継された。この映像がDVD化され、本年1月ナクソスジャパンより発売された。高島はその日本語字幕を担当した。その際、これまでの宝塚や東宝版の日本語上演や2005年版DVDでしか脚本の詳細を知らなかった多くの観客に、ミヒャエル・クンツェの歌詞の本来の姿を知ってもらえるよう腐心した。クンツェの哲学的テキストには、ニーチェの引用やナチス・ドイツの思想などに繋がるコメントなどが多く含まれている。また、ホフマンスタールの『イェーダーマン』ほど直接的・寓意的ではないが、中世から続くヨーロッパ文化の「死の舞踏」の文化概念が通奏低音のように流れている。作品の本質にも大きく影響するこうした側面は、これまでの日本語上演ではほとんど取り入れられていない、若しくは意図的に無視されている。

今回の字幕制作にあたっては、映画の字幕で一般的になった所謂「意識」ではなく、テキストの多くの部分を翻訳する「逐語訳」に近い翻訳となるように努めた。特に今回初めて映像に収録されたドイツ語版「愛と死のロンド」のテキストは、日本語版のそれとは根

本的に異なる。宝塚版で追加されたこのシーンと「憎しみ Hass」などで具体例を挙げ、翻訳作品の上演における困難と問題点について考察する。

口頭発表：文学 I (14:30~16:25)

C会場 (1113 教室)

司会：竹内 拓史・畑 一成

1. レッシング『ラオコーン』における自然模倣文学の否定

江口 大輔

レッシング『ラオコーン』第16章における、絵画における並列的記号と文芸における継起的記号を対比させた議論は、極めて平明かつ説得力を有するものとして受容されており、そこにはほぼ批判の余地がないようにも思われる。そのため、Wellbery (1984)や Mülder-Bach(1992)など『ラオコーン』研究において影響力をもった論考は、第16章の議論よりも、第3章や第6章における「想像力」をめぐる論述に焦点を当て、読解の可能性を広げてきた。単純化していえば、感性ではなく想像力を芸術受容の器官とみなすことでレッシングは諸芸術の比較を可能にしたのである。事実、第16章のみならず『ラオコーン』全体の論述を通して、絵画の記号と文芸の記号が与える感性的印象の相違は、論点から外されている。このことを間接的に示すのが、「自然的記号」という用語の不在である。本発表では、この用語の意味内容および構想における位置づけを確認したのち、この用語の不在が意図的なものであることを論じる。その意図とは、自然的記号の感性的な明証性という論点の隠蔽である。この論点はブライティンガーによる「詩は絵のごとく」の原則の理論化における出発点をなすもので、レッシングは、この論点を徹底的に排除した上で、第16章における演繹的な理論を展開した。『ラオコーン』における自然模倣文学の否定が、ブライティンガー『批判的詩論』との対決姿勢を密かに含んでいることを、他の傍証も挙げつつ示したい。

2. ゲオルク・ビュヒマン『翼のある言葉』初期の編集史

佐伯 啓

ゲオルク・ビュヒマン (Georg Büchmann 1822-1884) の『翼のある言葉』 („Geflügelte Worte“) はドイツ語圏でもっともよく知られた引用句辞典ではあるが、この書が学問的対象として本格的に論じられたことはほとんどない。数少ない先行研究を見ても、用いられている資料は戦後に刊行された新版や二次資料であることが多く、最初期の版に関する情報はあまり得られない。本発表の目的は、『翼のある言葉』初期の版 (ビュヒマン自身が編集作業に携わった1864年刊行の初版から1882年の13版まで) を主な対象とし、ビュヒマンと近い関係にあった人々の証言も踏まえつつ、この本が出版された経緯と彼自身が行なった改訂作業を精査しながら、『翼のある言葉』とはどういう書物かを文献学的、

実証主義的に考察することである。

初期の版の編集史を辿る上でまず重要となるのは、ビュヒマン自身の言述である。版が変わるごとに細かく書き直されている序論からは、たとえば「翼のある言葉」と「ことわざ」との関係に関する彼の考え方が読み取れる。またテキストの本文中にも、初期の版にしか記されておらず、のちに削除された重要な証言が見出される。さらにもう1つ、ビュヒマンの改訂作業に大きな役割を果たしたのは、読者との手紙のやりとり及び当時の文学雑誌や新聞に掲載された書評である。出版物としての『翼のある言葉』の成功は、読者との協働作業（Mitarbeiterschaft）に依る部分がきわめて大きい。本発表ではこの部分についても論じたい。

3. 隠者たちの白日夢——E. T. A. ホフマンによるノヴァーリスの批判的受容 清水 恒志

本発表は『セラピオン同人集』中に示されたホフマンの中心的詩学とされる「セラピオン原理」を芸術家の想像力と小説メディア、市民社会との関わりから論じる。結論を先んじて言えば、「隠者セラピオン」の狂気の詩人セラピオンは初期ロマン主義の詩学を象徴し、「弟子」となるセラピオン同人たちの創作原理はその批判的受容を示している。

ノヴァーリスとホフマンはロマン主義の文学者として、想像力と仮構を「夢」とし、精神に対する外界を「外」と表現する点で共通する。前者が「世界は精神の顕現である」として、空想や心情に絶対の優位を認め、そこから歴史の展開を「夢」への目覚めの道程とする一方、ホフマンの『隠者セラピオン』にあって「常なる夢」にある隠者の語りは優れた仮構でありながら、社会との共同性を持たない点で現実の作品となり得ない。大革命以後の市民社会の詩学であるセラピオン原理では、精神が「本当に見たもの」を「外の生へと持ち込むこと」、すなわち詩的直観を小説メディアとして具体化し、公共性へ結び付けることが求められる。

従来ノヴァーリスのホフマンへの影響はなかば自明の前提とされ、またセラピオン原理については詩的直観と視覚、あるいは語りに関わる点が主に論じられてきた。これらの先行研究はそれ自体妥当ではあるが、本発表の視座は小説文化の成熟期に商業的な作家として活動したホフマンの作品研究に不可欠なものであると考えられる。

ブース発表 I (14:30~16:00)

D 会場 (1114 教室)

Lernendenzentrierter Unterricht mit Portfolioarbeit

Nancy Yanagita

(共同発表者 : Maria Gabriela Schmidt, Christian Steger,
Martina Gunske von Kölln, Cezar Constantinescu)

Diese Kabinenpräsentation verfolgt das Ziel, gegenwärtige Formen der Portfolioarbeit und des Sprachenportfolios im Fremdsprachenunterricht Deutsch in Japan vorzustellen und zu diskutieren. Warum sind Portfolios ein vielversprechendes Instrument für den gegenwärtigen DaF-Unterricht in Japan? Welche Formen der Portfolioarbeit gibt es? Wie können sie im japanischen Kontext umgesetzt werden? Die Formen der Portfolioarbeit dienen im Fremdsprachenunterricht 1) der Lernendenzentrierung und Binnendifferenzierung, 2) der Förderung des autonomen Lernens, 3) als Reflektionsinstrument für Lernende, 4) als Instrument für formatives Assessment im handlungsorientierten Unterricht und 5) der lernbegleitenden Dokumentation. Die These ist, dass das Fremdsprachenportfolio durchaus eine ernstzunehmende Ergänzung oder Alternative zur vorherrschenden Testkultur in Japan bieten kann, im Sinne eines nachhaltigen Fremdsprachenlernens.

Nach einer Darstellung der Forschungsliteratur im Fach DaF und darüber hinaus in Europa und Japan (ca. 20 Min.) werden anhand mehrerer Praxisbeispiele neue Möglichkeiten zur Reformierung eines DaF-Unterrichts, der den Erwartungen des 21. Jahrhundert entspricht, aufgezeigt (ca. 40 Min.). Abschließend wird gemeinsam über die Ergebnisse der Kabinenpräsentation sowie weitere Aufgaben diskutiert (ca. 30 Min.).

ブース発表 II (16:30~18:00)

D 会場 (1114 教室)

オンライン教材を用いた発音指導および評価の方法について—学習者のワークシート分析から

中川 純子

(共同発表者 : 立川 睦美)

①研究対象の説明

ドイツ語の教授法研究では、発音がテーマになること自体少ない。本研究はその中でも議論が少ない、授業への組み込みの提案である。また授業におけるオンラインコンテンツの体系的利用はまだ過渡期であり、本研究はその1つの試みである。

②先行研究との関係

本研究は、ドイツ語教育の先行研究のほか、主として英語教育、日本語教育研究の考察に基づいている。授業において発音の扱いが少ない理由はこれまでの研究から大きく以下の3つの点にまとめられる：1) 語彙や文法と異なり、習った事項だけを使うという段階的使用が不可能であり、扱いづらいという問題、2) 発音指導は学習者の精神面と結びつきが強く、指導過程でかえって発音の自信を喪失させるなどのリスクの問題、3) 評価基準や方法が一定せず、テストもしにくいという問題。これらに加え、教材での扱いも少なく、教員個人の意欲だけでは解決できない面がある。

③ブース発表で主張したいテーゼ

筆者らは10年以上にわたってドイツ語発音学習教材の開発を続けている。これまでの研究の成果を元に2019年からウェブサイトでの学習素材を公開し、2021年からはYouTubeのチャンネルをドイツ語と日本語の2言語で開設している。本発表では、このウェブサイトを利用してパイロット実験として行った2022年の授業における発音導入の方法を紹介し、本方法が発音学習への動機化、学習者の自立化のみならず、文法や語彙学習にもつながったことを示す。

第2日 6月4日(日)

シンポジウムⅢ(10:00~13:00)

A会場(1103教室)

ドイツ語授業における文法規則の明示的指導の役割

司会：境一三

文法を持たない言語はなく、文法をまったく扱わずにドイツ語授業を行うことは考えられないだろう。日本における多くのドイツ語授業では、文法規則を明示的に教えることが授業の中心的な内容になっているのではないだろうか。しかしその一方で、文法を明示的に教えることをできるだけ避けるドイツ語教育を実践している大学や、文法項目の明示的指導をまったく行わずにタスク中心のシラバスを組んでいる大学もある。それらの大学ではいったいどのような理念のもと、どのようにして文法能力の発展を試みているのだろうか。そもそも文法規則を明示的に教えることのメリット、デメリットは何か。これまでの実証研究では、文法規則の明示的指導の効果についてどのようなことが示されているのか。文法規則は学習者が独力では身につけられないものなのか。授業では文法をどこまでどの程度明示的に扱うべきなのか、あるいは扱うべきでないのか。本シンポジウムでは、これらの問いをめぐり、理論研究・実証研究の知見を紹介する発表1つと、3つの異なる立場から授業実践および教科書・参考書の執筆に携わっているドイツ語教師3名による発表3つを行い、最後にパネル・ディスカッションを行う。

最初の太田発表では、文法の明示的指導をめぐる先行研究と外国語教育の目標に関する国内外の議論を紹介し、もっぱら明示的知識を与えることを中心とした授業が必ずしも効果的であるとは示されていないこと、むしろ適切なタイミングと扱い方が重要であること、文法の扱いについては外国語教育の目標を考慮したうえで考えるべきであることを示す。

続く梶浦発表では、コミュニカティブ・アプローチに基づいた共通教科書を使用して授業を行う教師の立場から実証的研究の調査結果について報告し、コミュニカティブな授業を受けるドイツ語学習者が文法学習をどのように捉えているのかのデータを示す。

次の清野発表では、日本のドイツ語教科書の分析をもとに、暗示的知識の習得を促す明示的な文法授業はどのようなものかについて報告し、明示的な文法教授の必要性は「説明してもらわないとなかなか自分で気づけないこと」を明示的に教えることにある、と主張する。

最後の草本発表では、ドイツ語授業において教科書を手放し、文法を体系的・明示的に教えず、学習者の要望によりその都度扱うだけでもドイツ語の知識が獲得できることを、TBLT (Task Based Language Teaching) に基づく授業実践例を通じて示す。観察したクラスの作文課題では、文法を偶発的にしか教えていないにもかかわらず、大半の学習者が比較的複雑な文法ルールを使いこなしていた。

1. ドイツ語授業における文法の扱い—第二言語習得研究および外国語教育論の視点から 太田 達也

明示的知識と暗示的知識の関係に関する研究では、前者と後者は無関係とする「ノン・インターフェイス仮説」、後者の発展には前者が間接的役割を果たすとする「弱いインターフェイス仮説」、前者と後者には強力な関係があるとする「強いインターフェイス仮説」の3つの立場があるが、近年の議論では「弱いインターフェイス仮説」が最も有力である。ただし、一定の条件下での明示的指導の効果を支持する研究もある。一方、明示的知識の教授よりも豊富なインプットとインターアクションからの気づきと内在化による暗示的知識の発展というルートでの外国語教育を推奨する研究も少なくない。社会的構成主義に依拠した外国語教育では、文法を明示的に教えることの意味は否定しないものの、学習者個人の頭の中にある「内在的文法」を促進する環境を構築することが重視される。また、外国語教育の目標をめぐる近年の議論では、協働能力・批判的思考能力・責任感といった言語以外のスキルも含む「汎用的な資質・能力（コンピテンシー）」の育成が重視されている。ドイツ語の授業における文法の扱いを考えるにあたっては、こうした研究の知見や近年の議論を知ったうえで、それぞれの学習状況に応じた方法を選択すべきであろう。文法規則の明示的指導については、どのようなタイミングでどのような指導を行うべきかを、教育の目標そのものや育成したい学習者像に鑑みたくて適切に判断する必要がある。

2. ドイツ語学習者は文法学習をどのように捉えているのかーコミュニカティブな授業における学習者の自己評価と文法学習の方法 梶浦 直子

コミュニカティブ・アプローチに基づいた教科書を使用した授業では、教師が文法規則を明示的に説明するのではなく、学習者が目標言語を使用しながら文法を発見的に学ぶ。このような教科書に対して、教師は「教えづらい」と感じているという調査結果がある（梶浦 2017, Bachmaier 2017）。一方、学習者はコミュニカティブな教科書をおおむね肯定的に評価していることが報告されている（藤原 2017, 梶浦 2018）。いずれの研究結果においても、文法学習の方法に対する意見が教科書の評価に影響を与えていることが示唆された。

発表者は、学習者の「できる」という肯定的な自己評価に焦点を当て、コミュニカティブ・アプローチに基づいた共通教科書を使用する学習者を対象として、質問紙調査ならびにインタビュー調査をおこなった。質問紙調査（2018年7月：165名、2019年1月：157名）を分析した結果、「できる」と感じる学習者は、具体的に何ができるかを回答したのに対し、「できる」と感じない学習者は、文法学習に困難を抱えている様子が浮かび上がった。また、インタビュー調査（2018年7月～8月：14名、2019年1月～3月：14名）の結果、これまでとは違う学習成果、すなわち「ドイツ語を使ってできる」と学習者が認識することにより、ドイツ語学習に対する考えが変化した様子が明らかとなった。

本発表では、ドイツ語学習者の外国語学習に対する考えがどのように変化したのかを、インタビュー調査の分析結果を中心に報告する。

3. ドイツ語授業における文法の扱いー教科書・参考書の執筆者の立場から 清野 智昭

近年の第二言語習得研究では、明示的知識が暗示的知識の発展に間接的役割を果たすとする「弱いインターフェイス仮説」を支持する研究が優勢なのにも関わらず、実際の授業の場で用いられる教科書の大半では、ほぼ一定の順序で文法項目を並べて、その文法項目を逸脱しない形で、会話文や読解テキスト、練習問題が作成されている。

この形式は、教師の大半が非母語話者で、自らが明示的な文法教育を受けた結果、文法知識を習得したという成功体験と、同様の形式の授業をすれば、文法知識を教授することができるビリーフを持っているからだと思われる。また、日本のドイツ語教育で使用される教科書の大多数が、日本の出版社が出版する商業出版物であるという特殊事情がある。

本報告では、そのような日本のドイツ語教科書を分析するとともに、暗示的知識の習得を促す明示的な文法授業はどのようなものかを報告する。報告者の基本的な考えでは、現在の「文法」の授業が形態論に偏りすぎていて、これを是正すべきである。定冠詞の格変化だけでなく、冠詞の用法の基本にある「定性」、動詞の位置だけでなく、「文」の概念と語順の原理を明示的に教えることが重要である。「明示的な文法教授」は必要だが、それは単なる形態的な練習ではなく、「説明してもらわないとなかなか自分で気づけないこと」を明示的に教えることこそが、授業で文法を扱う意義なのである。

4. 文法の学び方をリセットする—コンセプトと実践

草本 晶

本発表では、文法を体系的・積み上げ式に教えるのではなく、学習者の要望によってその都度取り扱うだけでも十分ドイツ語の知識が獲得できることを、実践例を通じて証明する。

Rod Ellis や Michael Long など TBLT (Task Based Language Teaching) の提唱者たちは、文法学習中心であった第二言語習得に社会的構成主義の考え方を取り入れ、まずは学習者同士の「有意義なインターアクション」を中心に据える一方、文法などの言語知識は後から扱うことにより、効果的に言語能力を身につけることができると主張している。本発表では、この理論に基づいて文法の教科書を手放し、教師が知識を伝授する方式ではなく、学習者が自ら学ぶ方式の授業について報告する。

この形の授業は、多量のインプット、発見学習、グループ学習、プレゼンテーションとともに、言語のしくみである文法を学ぶことから成り立っているが、文法を扱うのはあくまで学習者から要望が出たときのみである。学習者は知りたいタイミングで知りたいことを質問し、教師側は「この文法を学びなさい」といった指導をすることはしない。あくまで学習者のニーズが中心にあり、教師はサポーター役に回る。この方法だと初級文法のすべての項目が扱われない可能性が高いが、それでも学習者たちはドイツ語の力を十分に身につけることができるのか。あるクラスの作文課題を用いて検証する。

シンポジウムIV (10:00~13:00)

B会場 (1106教室)

「ペストとドイツ文学——ヨーロッパ文化史の中で再考する」

司会：関口 裕昭

2020年の初め、中国の武漢から世界中に拡まった新型コロナウイルスの猛威は、3年余を経過した現在も留まることを知らず、我々の生活や価値観のみならず文学への取り組み方をも根本的に変えてしまった。人類と感染症との闘いの歴史は古い。なかでも「黒死病」と恐れられたペストの猛威はすさまじく、ヨーロッパの命運を左右してきた。このペストに注目し、ドイツ文学を広くヨーロッパ文化史の文脈の中でとらえ直し、感染症と文学の関係、および新しい時代の文学研究を探るのが本シンポジウムのねらいである。

その指針を与えてくれるのがエーゴン・フリーデルの『近代文化史』(1927)である。ルネサンスから第一次世界大戦の勃発までのヨーロッパの文化史を五幕の劇に仕立てたこの書は、14世紀半ばに猖獗を極めたペストから始まる。フリーデルは、ペストが近代の幕開けになったのではなく、「最初に〈近代〉があって、それによってペストが生じた」、「どの時代も特有の病気を持っている」と主張する。つまり、我々はどの時代においても、時代の特質からうまれた見えない敵(ウイルス)と戦っているともいえるわけであり、その戦いの歴史を検証することは、ヨーロッパ文学とその中でドイツ文学の果たす位置を再考

し、また「ウィズ・コロナ」となる今後の我々の生活や研究にもヒントを与えてくれるだろう。

本シンポジウムは、ヨーロッパにおけるペストと文学の歴史を、マクロとミクロの視点を往復しながら考察する。国境を越えて拡大する感染症を、「ドイツ(語圏)文学」という枠内でとらえることは不可能である。そこで気鋭の英文学者、原田範行氏をゲストに招き、英文学におけるペストへの視座を交えながら、17世紀から20世紀に至る重要な作家と作品を取り上げ、彼らがペストをどのように描き、当時の人々がペストとどう向かい合っていたのかを考察する。

全体の構成は以下になる。まず、関口がペスト菌の特質と病状、ヨーロッパにおける感染の歴史を概観し、広くヨーロッパ文化史の文脈からドイツ語圏文学におけるペストの記述を位置づける。これにつづき、原田がデフォーの『ペストの記憶』(1722)について時代背景を明らかにしながら今日の視点から問題を提示する。田村はスイスの作家ゴットヘルフが民間伝承をもとに想像力を駆使してペスト禍を描いた『黒い蜘蛛』(1842)について論じ、出繩はシュティフターの短編『御影石』(1853)とその原型となった『瀝青焼き職人』(1848)を比較し、ペストの記憶をめぐる作者の語りの方を考察する。最後に関根は、ホフマンスタールの短編「バッソンピエール元帥の体験」を取り上げ、ゲーテとの比較を通してウィーン世紀末における「性と死」の特質を論じる。

時間や人数の制約から、扱う作品は20世紀までにとどまる。それ以降の現代の文学でペストはどう論じられ、また我々はどう取り組むべきかについては、会場の参加者との活発な議論を通して考察を深めたい。

1. 「ペストとドイツ文学——ウィーン文化史を中心に」

関口 裕昭

ヨーロッパ文学は、デカメロンからカミュの『ペスト』に至るまで、ペストとの長い闘いを通して形成されてきた。この流れの中でドイツ語圏文学にも、幾つかの特質が認められるのではないか。こうした問題意識のもとに、本発表は次の二部から構成される。

最初にペスト菌の特質、感染経路や対策、ヨーロッパ各都市での感染爆発の歴史を1348年の大流行から現在に至るまでを簡単にたどる。「鞭打ち業者の行列」や「死の舞踏」、「ユダヤ人陰謀説」についても説明する。

続いて、ドイツ文学におけるペスト記述を年代順に考察する。クライストやゲーテの作品が広く知られているが、その中心をなすのがウィーンでの感染爆発を題材にした作家たちある。ウィーンでは1349年から1712年の最後の流行に至るまで18回もペストの流行に襲われた。その甚大な影響は、市の中心部に今も残るペスト記念柱が物語っている。

17世紀の説教師アブラハム・ア・サンクト・クララの詳細な手記や「愛しのアウグステーン」の歌に始まり、シュティフター、ホフマンスタール、リルケらの世紀末の作家からベルツを経てツェランのいくつかの詩、現代のロッテ・イングリッシュに至るまで、オーストリア文学の中でペストは脈々と描き継がれてきた。「生と死」を凝視したウ

イーン世紀末の精神を反映しつつ、反ユダヤ主義やナチスへの暗示が随所に現れる。こうした現象の中にドイツ文学における受容の特質が現れているといえよう。

2. 「デフォーと『ペストの記憶』」

原田 範行

イギリス近代小説の揺籃期に活躍したダニエル・デフォーは、17世紀半ばにロンドンを襲ったペストの大流行に材を得て、1722年、これを『ペストの記憶』にまとめている。この作品が、文学史や文化史、あるいは広く、今日のコロナ禍を考える上で示唆的なのは、少なくとも次の3点による。一つは、『ロビンソン・クルーソー』をはじめ、広く海外を旅する主人公を常に描いていたデフォーが、本作においては一貫してペストが猖獗を極めるロンドンを描き切っていること。すなわち、イギリスそしてヨーロッパから外へと広がっていくかに見えた近代精神とは全く逆の方向性を有した作品であるということである。二つ目は、作品のめぼしい主人公が不在で、最初から最後まで重要な役割を果たすのは、ペストそのものだけということ。近代的歩みを始めた人間社会にとって、外部的存在であるこのペストが、人間社会を極限にまで追いつめていくのである。そして第三の点は、もし本作の主人公がペストであるとするならば、作者デフォーはその死や終焉を必ずしも描いてはいないということである。「それでも私は生きている！」という語り手が最後にもらす感懐は、なるほど安堵の念に満ちてはいるものの、そこにペスト征服を寿ぐ歓声はない。それは近代的な人間理性への疑念を示しているときええよう。

本発表では、上記三つの特徴を軸に、デフォーが『ペストの記憶』に託したメッセージを改めて検討したい。

3. 「ゴットヘルフ『黒い蜘蛛』とペスト」

田村 久男

スイスでも14世紀半ばから繰り返しペストによる大きな災禍に見舞われた。この記憶は現在でも各地に遺物（ペスト十字架など）や伝承として残り、J. ゴットヘルフはこれらの伝説を素材に1842年に短編小説『黒い蜘蛛』を発表した。この作品では、直接の言及はないもののペストを強く暗示する表現（「病気」「瘤」「黒い死」）があり、陰惨な描写とも相まってペストを描いた作品とみなされている。

赤子の洗礼式に招かれた客たちに家長が、新築のたびに受け継がれてきた古い柱の由来を語る。かつて住民の軽率な行為により毒蜘蛛が生まれ、二度にわたって大きな禍が繰り返された。この戒めにと、あえて蜘蛛を封じた柱を身近に残しておくのだという。作品の構成自体が若い世代に過去の過ちを物語るという形をとっており、また、悪魔との戦いで住民が唯一頼みとする神父が死に、万策尽きた末に解決に導くのは赤子の母親の記憶にあった昔の伝説である。

発表当初は通俗的怪奇小説として軽視されたものの、20世紀に入って特にペストとの関連から重視され、ドイツ文学の名作として高く評価されるようになった。その一方で、多

くの二次的な創作作品も生れる。オペラも含めたたびたび舞台化され、さらには書き換えられ単純化された形で民話集にも収められた。コロナ禍の2021年には三度目の映画化もされた。ペストの伝承という視点からこの作品を考える。

4. 「シュティフター『瀝青焼き職人』と『御影石』における改作とペストの記憶」

出縄 祐介

アーダルベルト・シュティフターの短編『瀝青焼き職人』は改作を重ねられ、連作集『石さまさま』に収められるにあたり『御影石』と改題された。両作品とも一人称の語り手が、幼少期に祖父から語り継がれた、1713年頃のオーバープランにおけるペストの惨状を描写している。『御影石』では、『瀝青焼き職人』におけるペストの描写が改変され、悲劇の直接的描写が回避されている。さらに『瀝青焼き職人』での職人家族の描写も削られている。両作品においてペストが蔓延する社会が描写テーマとなっているが、『御影石』では祖父との対話を想起しながらオーバープランの風景や母との関係などが描写されている。『瀝青焼き職人』と比較すると、作者は序文における調和のとれた作品構成を『御影石』で意識していたと考えられる。

さらに語り手は幼少期から伝承されたペストの惨状を大人になってからも記憶しているが、口承伝統という手法を導入することで生家前に置かれた大きな四角い石が、その記憶装置として機能しているともいえる。しかしペストの記憶は社会からしだいに薄れていったため、作者は口頭伝承に教育的な機能をも持たせている。この教育的な側面が、ペストという負の記憶を扱う作品全体に柔らかな光を与え、調和のとれた作品構成を生み出している。

本発表では、改作過程や作品内の伝承方法を通して、作者がペストの描写を回避した背景とシュティフター作品における調和について考察する。

5. 「ホフマンスタール『バッソンピエール元帥の体験』における愛と死」 関根 裕子

フーゴー・フォン・ホフマンスタール（1874-1929）が1900年に発表した短編小説『バッソンピエール元帥の体験(*Erlebnis des Marschalls von Bassompierre*)』は、ペストが流行していた1600年頃のパリを舞台に、実在したバッソンピエール元帥が経験した見知らぬ女との一夜限りのエロティックな逢瀬の描写と、その女とおぼしき人物のペストによる死という結末とのコントラストが、強い印象を与える作品である。

当時、翻訳や翻案手法を研究していたホフマンスタールが底本としたのは、*Mémoires du Marechal de Bassompierre* とゲーテによる翻案『ドイツ避難民閑話集』所収の一話である。ゲーテからの盗作と批判されたことに対して、ホフマンスタールが第二部発表時に、原書やゲーテからの引用部分を明記し、釈明したように、本作品には語彙の選択までゲーテと似ている部分がある。

しかし同素材に対する二人の翻案手法を比較すると、ウィーン世紀転換期詩人ホフマンスタールの特徴が浮き彫りになる。本発表では、構成の違いを述べた後、ペストに関する表現と、とくにゲーテには無い、アバンチュール時の暖炉の炎と部屋の壁に投影された影と連動したエロスの比喩表現に焦点を当てる。この炎は、結末で思わぬ方向で死と結びつく。エロスの歓喜と死の恐怖が、炎という媒体を通して一つになっている。ウィーン世紀末文化の特徴である「エロスと死」の親近性が印象主義的に描き出されているのである。

口頭発表：文学Ⅱ（10:00～12:35）

C会場（1113教室）

司会：広沢 絵里子・Tobias Schickhaus

1. 「審美主義と野蛮の近接性」を求めて——トーマス・マン『ファウストゥス博士』におけるニーチェ批判とアドルノ音楽論の交点 渡邊 能寛

本発表の目的は、トーマス・マンのニーチェ解釈を通じて『ファウストゥス博士』執筆期のアドルノ受容を再検討することである。本作とニーチェ哲学の関連は数多くの研究者によって繰り返し検討が重ねられてきた（Pütz 1963, Schubert 1986, Joseph 1998, 下程 2000 u. a.）。しかし長らく顧みられてこなかったのは、マンが小説の副産物として成立させた『我々の経験に照らしたニーチェ哲学』において初期の著作『生に対する歴史の効用と害』を重視し、ここに後期の権力哲学へと至る「根本思想」を見出していたことである。この中でニーチェは、健やかな生を享受するためにはイロニーを放棄し、「みずからを限られた視界のうちに閉じ込める」必要があると主張している。この所謂《能動的忘却》論が、後期の芸術賛美を経由して、『新音楽の哲学』におけるアドルノの「閉じた作品」（das geschlossene Kunstwerk）批判とネガティブに響き合う。芸術家は自己完結した仮象の創出を志向する限り、ニーチェが陥ったのと同じ独断主義の野蛮に手を貸すことになる。そして、この批判は実作者たるマン自身にも跳ね返ってこざるを得ない。

こうした準備分析を経た後、『ファウストゥス』を——作家によって主題とされながら、その不在が半ば定説化していた——「審美主義と野蛮の近接性」（Nachbarschaft von Ästhetizismus und Barbarei [GKFA 10.1, 541]）を巡る、芸術家による自己批判の物語として提示する。イロニーの過剰に悩む天才音楽家アドリアン・レヴァーキューンは、能動的忘却の力を借りて現代芸術を苛む不毛を打開しようとするが、それは破滅への道であった。

2. 初期ベンヤミンの女性像 — 『親和力』論におけるジンメル『ゲーテ』批判を手がかりに 寒河江 陽

20世紀転換期のドイツでは、婦人解放運動など個人の権利を主張する運動が起こった。

そうしたなか、ジェンダーの概念を用いて社会分析を行った社会学者の一人がゲオルク・ジンメル（1858-1918）である。本発表で注目するのは、ジェンダーの不均衡さを指摘したジンメルの著作『ゲーテ』を、ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）が、『ゲーテの親和力』（1921/1922）にて批判していることである。ジンメルとベンヤミンの繋がりを見る先行研究は、主に語り手論や表象の観点から、大きく二つの見方を取ってきた。一方で、ベンヤミンとジンメルの表象の類似性を強調し（Steiner 1986）、他方で、両者の相違点を強調してきたのである（Speth 1991）。このように、ベンヤミンがジンメルの女性文化論をどのように批判したのかという観点では探求されなかった。

しかし、ベンヤミンがジンメルの「女性文化」を読み、自身も「女性文化」という言葉を用いるなど、ジンメルの論を参考にしていたこと（Mičko, 2010）を踏まえると、『ゲーテの親和力』におけるベンヤミンによるジンメル批判は以下のように考えることができよう。すなわち、女性の位置づけに関するジンメルの考えに対して、ベンヤミンが異議を唱えている、ということである。

ここから本発表では、ベンヤミンの『親和力』論をジンメルの女性文化論やゲーテ論を補助線として再解釈することで、ベンヤミンとゲーテの両者が女性のあり方を別様に理解していたことを示し、『親和力』論の新たな読解の可能性を拓くことを目指したい。

3. Wut – Wahnwitz – Viren. Elfriede Jelineks Kritik des Opfer-Kults Herrad Heselhaus

In ihren kurzen Theatertexten der letzten zehn Jahre, die die Themen von Flucht, Ausbeutung, Gewalt und Krieg behandeln, hat sich Elfriede Jelinek immer wieder kritisch, ja geradezu sarkastisch mit René Girards Thesen zu Klimax und Krise des Opferkults und zu Mimesisstrukturen der Gewalt auseinandergesetzt. Zu diesen Theatertexten zählen vor allem die Addendatexte zu den „Schutzbefohlenen“ und „Wut“, i.e. „Coda“, „Philemon und Baucis“, „Unseres“. Um so erstaunlicher ist es, dass die Sekundärliteratur zu diesen Texten von Jelinek (siehe z.B. Felber, Lücke) stur an einem unhinterfragten Erklärungspotential der Thesen Girards festhält, und dies trotz der offensichtlichen bodenlosen Ironie, mit der Jelinek auf Girard verweist. Der Vortrag wird auch zeigen, wie Jelinek antike Literatur intertextuell verwendet, um die Problematik der Girardschen Argumentation aufzuzeigen und sie eben nicht nur naiv zu illustrieren. (siehe z.B. „Metamorphosen“, „Herakles“, „Iphigenie auf Aulis“). Wie wichtig Jelineks so wenig verstandene Dekonstruktion Girards ist, zeigt u.a. auch Culkin's kürzlich erschienenenes „Rene Girard and Covid-19: satan. capitalism. apocalypse.“ Der Vortrag möchte zu einer lebhaften, kritischen Diskussion zu diesem aktuellen Thema animieren.

口頭発表：ドイツ語教育、文化・社会（10:00～11:55）

D会場（1114教室）

司会：Susanne Schermann・水野真紀子

1. Ich denke, was ich bin. Wie die Einstellung zu sich selbst die Lernmotivation beeinflusst.

Frank Nickel

Als Zielorientierungen des Lernens werden einerseits als dauerhaft im Gedächtnis repräsentierte Überzeugungen verstanden, andererseits aber auch situativ erzeugte (etwa durch Ankündigung eines Tests), die zu einer entsprechenden Motivation führen (etwa wettbewerbsbezogenes Denken). Hierfür sind besonders die Arbeiten von Dweck (1991), Nicholls (1989) und deren Weiterentwicklung durch und Elliot und Harackiewicz (1996) von Bedeutung.

Allerdings sind Zielorientierung nicht immer positiv, denn „[o]ffenbar tragen wir selbst in allen Lebensbereichen, also auch in Lehr-Lern-Kontexten, immer wieder ungewollt dazu bei, »denn wir führen – ohne es zu wissen und zu wollen – sehr oft regelrechte Demotivationskampagnen durch“ (Karragianakis et al. (2017)). Hierzu konnte Çankaya (2018) belegen, dass zu den demotivierenden Faktoren unter anderem Misserfolgserlebnisse, ein Mangel an intrinsischer Motivation und Lehrende gehören. Hingegen gehören konstruktives Feedback, eine Selbstwahrnehmung und Selbstbeurteilung des sprachlichen Handelns zu einer konstruktiven Unterstützung (vgl. Lindauer (2018)).

Durch eine Untersuchung von 49 Studierenden konnte eine Korrelation bewiesen werden, zwischen dem Glauben an eine feste Intelligenz und an Vermeidungs-bewältigungsziele bzw. Vermeidungsleistungsziele. Sowohl die Korrelationswerte zwischen dem Glauben an eine unveränderliche Intelligenz und Ziele zur Vermeidungsleistung als den Zielen zur Vermeidungsleistung sind positiv und haben einen mittleren Effekt.

Literatur

Dweck, C. S. (1991). Self-theories and goals: Their role in motivation, personality, and development. In R. A. Dienstbier (Hrsg.), Nebraska symposium on motivation (Bd. 38, S. 199–235)., Perspectives on Motivation Lincoln: University of Nebraska Press.

Elliot, A. J., & Harackiewicz, J. M. (1996). Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation: A mediational analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 461–475.

Çankaya, Pinar (2018). Demotivation Factors in Foreign Language Learning. *Journal of Foreign Language Education and Technology*. 3/2018 (1). 1-17.

Lindauer, Thomas; Schmellentin, Claudia (2018). Sprachlernen durch sozialen und Reflexionen über Sprache – Sprachlernprozesse gezielt begleiten und strukturieren. In:

Grundler, Elke (Hg.): Wirksamer Deutschunterricht. Baltmannsweiler. Schneider Verlag Hohengehren.

2. Gendern im Deutschunterricht: Eine Umfrage unter DaF Lehrenden in Japan

Ruben Kuklinski

(共同発表者：Ralph Degen, Elvira Bachmaier)

Im Deutschen lässt sich aktuell ein heiß diskutierter Sprachwandel beobachten: das so genannte Gendern, das die Gleichstellung aller Geschlechter auch in der Sprache sichtbar macht. Symbolträchtigste Neuschöpfung ist der „Genderstern“ (*Japaner*in*). Zwar steht eine offizielle Legitimierung durch den Rat für deutsche Rechtschreibung noch aus; wer sich jedoch mit aktuellen Originalquellen befasst, wird in der Realität längst mit dem Gendern konfrontiert.

Die innerdeutsche DaF-Lehre betrachtet diesen Sprachwandel bislang mit großer Skepsis. Entsprechend werden neue Genderformen in den gängigen DaF-Lehrwerken bisher kaum thematisiert (vgl. Freese/Völkel 2022, Lipsky 2021). Es gibt allerdings noch keine Studien, die die Haltung der DaF-Lehrenden gegenüber dem Gendern untersuchen. An dieser Stelle setzt die vorliegende Forschung an: Ziel ist es, die Einstellungen und Meinungen zur Gendersprache erstmals empirisch zu erfassen, und zwar unter DaF-Lehrenden in Japan. Zu diesem Zweck wurden in einer Pilotstudie 48 ausgewählte DaF-Lehrkräfte an japanischen Universitäten zu ihren Einstellungen und bisherigen Erfahrungen rund um „Gendern im DaF-Unterricht“ befragt. Erste Ergebnisse der Analyse legen den Schluss nahe, dass Gendern tendenziell als relevantes Thema wahrgenommen wird. Die Befragten wünschen sich mehrheitlich, dass das Gendern Eingang in den DaF-Unterricht in Japan findet. Gleichzeitig werden Schwierigkeiten bei der Umsetzung wie etwa fehlendes Lehrmaterial genannt. Die Ergebnisse dieser Pilotstudie bilden die Grundlage für eine breiter angelegte repräsentative Umfrage, die in Kürze folgen soll.

3. ヘッセの出版企画と日本へのまなざし—『日本の物語』から見る一側面 田中 洋

本発表は近現代ドイツ・スイスの詩人そして作家であるヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse, 1877-1962) の 1920 年代初頭の出版企画活動に焦点を当てる。中期の代表作となる小説『シッダールタ』 (*Siddhartha*, 1922) 執筆の停滞、家庭生活および自身の精神状態の悪化、そして経済的な困窮という非常に厳しい状況のさなか、ヘッセは 1918 年から 1926 年の間に 46 の出版企画に携わった。本発表で取り上げる『日本の物語』 (*Geschichten aus Japan*, 1922) は、ゼルトヴィーラから *Merkwürdige Geschichten* のタイトルで 6 巻シリー

ズとして刊行されたうちの 1 冊であり、ヘッセの独力で編集された。その「あとがき」によれば、同書は幕末の日本に駐日英国公使館員として滞在した A. B. ミットフォード著『昔の日本の物語』（*Tales of old Japan*, 1871）のドイツ語訳である *Geschichten aus Alt-Japan*（1875）から編んだ選集であり、ヘッセはこれにわずかに手を入れたとしている。ヘッセのアジアへの傾倒に鑑みて、同書が「日本」をタイトルに掲げながらも、Mileck（1970）を除いて研究対象として扱われてこなかったことは意外とも言えよう。本発表では『日本の物語』を通じてヘッセの日本観への理解を一步推し進めるとともに、*Geschichten aus Alt-Japan* と『日本の物語』を比較し、内容、構成および表現における異同の考察を踏まえ、作家の執筆活動における出版企画の仕事の意義も明らかにしたい。